

第3章 オホーツク文化

片原顕光

3.1 オホーツク文化

3.1.1 オホーツク文化とは

北海道の古代文化は、本州とは内容や時間的位置づけに違いが見られ、非常に独自性の強いことが特徴である。北海道に最初に移り住んだのは北方の大陸方面から渡来してきた旧石器時代人であるといわれている。その後、本州からは若干遅れて約 8000 年前に縄文時代をむかえた。本州が弥生時代に突入するころ、稲作文化が伝来しなかった北海道では、約 2000 年前に独自の続縄文文化が始まり、本州が古墳、平安、鎌倉時代へと移り変わる約 1400 年から 600 年前に擦文文化をむかえ、その後アイヌ文化をむかえた。これが北海道の古代史の大まかな流れである。

このなかにあつて 5～9 世紀ごろ、続縄文文化から擦文文化にかけて北方のサハリン方面から渡来してきた外来系の文化があつた。多くは擦文文化と併行しながら海岸付近に居住し、海の幸を最大限に生かした生活を築きあげるといふ極めて特殊な民族である。これがモヨロ貝塚の人々なのである。

モヨロ貝塚周辺のみならず、オホーツク海沿岸には数多くのこれと似た文化が存在していたことが研究の結果明らかとなっており、宗谷地方以北のオホーツク海沿岸に見られるこれら文化を総じてオホーツク文化と呼ぶ。

表3-1 北海道の古代の編年表			
年代	本州	北海道	オホーツク海沿岸
前20000年	旧石器文化	旧石器文化	
前10000年			
前6000年	縄文文化	縄文文化	
前1000年			
前500年			
0年	弥生文化	続縄文文化	
500年			
1000年	奈良・平安・鎌倉時代	擦文文化	
1500年		アイヌ文化	

出所：資料より筆者作成

3.1.2 オホーツク文化の特徴

オホーツク海の沿岸には宗谷岬から知床岬納沙布岬にわたり長い海岸が続いている。沿岸地域は1月から3月にかけて流氷が押し寄せ、年間の平均気温は6℃と低いが、夏は30℃前後、冬は氷点下20℃近くになり、気温の年較差が極めて大きく、激しく四季が変化

する特異な自然環境である。日照時間は40%以上と高く年間の降雨量は1000mm以下と乾燥しており、積雪も40cmにとどまるため、自然災害は少なく、その意味では安定的な生活を営むのに適した気候であっただろう。

これらの自然条件に加え、流氷がもたらすプランクトンがオホーツク沿岸に良好な漁場を生み出しているために、モヨロ人をはじめとした多くのオホーツク文化の人々が海の幸を生かした生活を行っていたものと見られている。

3.2 モヨロ民族

3.2.1 モヨロ文化の特徴

オホーツク文化は一般的に5～12世紀頃に北海道を含めたオホーツク海沿岸部に見られた文化であるが、モヨロ文化は日本の縄文時代晩期ごろから存在する文化である。モヨロ人は9世紀頃、擦文文化の誕生とともに忽然と姿を消しており、詳しくはわかっていない。また、モヨロ文化を含めたオホーツク文化は、アイヌ文化とは一般的に区別され、この時代と地域に特有の文化であることが研究によって次第に明らかになってきている。

特徴的な文化様式の一つが、六角形の縦穴による大型の竪穴式住居である。貝塚と同様に網走川に沿うかたちで砂丘の周りに集中しており、遺跡指定を受けた時点では28軒の縦穴が確認されている。しかし戦前の工事に伴って現存している縦穴は20軒にまで減少したそうだが、いずれの縦穴も直径が10mを超えるものである。この住居の西北端からはヒグマ、エゾシカ、キタキツネ、イヌ、トド、ヤアザラシなどの頭骨がピラミッド状に高く積まれており、東南端にはこれらの動物の四肢骨が重ねられており、中央には石囲いの炉があった。これらを祀る文化があったことが確認されている。

さらに、住居付近には貝塚があり、ここからは海獣や他の動物の骨や角を加工して作った道具や、土器、石器が出土している。貝塚周辺の砂州の先端部に集中して貝塚が見つかり、砂地の表面から30cmほどのところでいくつもの層をなしているのが発見された。主に、ウバガイ、アサリ、ホタテガイなどが見つかっており、特に、ウネナシトマヤガイなどの温暖水系の貝類が含まれていたことから、現在よりも当時の方が気候的には暖かかった事がわかっている。また、本州から持ち込まれたと思われる鉄製の刀や大陸から持ち込まれたと思

図 3-2 モヨロ文化の縦穴式住居跡



出所：筆者撮影

図 3-3 出土したヒグマの彫刻



出所：筆者撮影

われる青銅の鈴なども出土している。土器や石器の加工技術は非常に高度で、抽象的ではない輪郭をもったリアリティあふれる彫刻や像も多く出土している。

また、貝塚からは墳墓も発掘されており、そのうち層が上の方からはアイヌ文化期のものが出土したが、下の層ではモヨロ文化独特の埋葬方法のとられた墳墓が見つかった。アイヌ文化では埋葬者の手足を伸ばして仰向けに葬る^{ぎょうがしんでんそう}仰臥伸展葬にのっとったものが見つかったのに対して、オホーツク文化では^{ぎょうがくつそう}仰臥屈葬という独特な方法がとられていた。これは死者の埋葬に際して両手足を折り曲げ縛り、背中を下に向けて仰向けに寝かせ、両腕は肘を曲げて両手を胸部の上に合わせしておき、両足も膝を曲げたかたちで葬られていた。頭にはオホーツク式の土器を被せており、いずれもオホーツク文化およびモヨロ文化に特有な埋葬方法である。

3.2.2 モヨロ人の人種的特徴

モヨロ人に限らずオホーツク文化圏の人々の顔面骨は、現在の日本人に比べ、左右に広く、上下にも長いという全体的に大きな顔をしていた。また、彫りの浅い平たい顔をしていた。これら特徴は、現在の世界の人類集団においては北東アジアに住む人によく見られる特徴であり、一般的には寒冷地域に対応した結果だと解釈されてきた経緯がある。

また、日本の先史時代から江戸時代までの人類史を通じて、推定平均身長が最も高いのがオホーツク人であり、モヨロ人も含まれている。またプロポーションは胴長で、前腕、下腿といった胴体に対して突起物となっている部分が小さいのが特徴である。それぞれ、ベルグマンの法則とアレンの法則に生態地理学的に矛盾しないものである。

1947年にモヨロ貝塚発掘調査の報告講演会にて、モヨロ貝塚研究員の児玉作左衛門氏はモヨロ人の以上の特徴を踏まえ「いろいろ比較研究の結果これはエスキモーの一分派であるアリユート族に最も近い」と結論づけたことは報告会のなかで最も注目を受けたが、発掘調査段団長の原田淑人氏によると「アイヌであったかツングースであった」との報告もあり、総じてモヨロ人はエスキモー・アーリュートなどの環極北圏文化の強い文化的影響と東北アジアや北海道とのつながりの中で複雑に形成されたものだと考察されている。

3.2.3 モヨロ人とアジアとの関わり

オホーツク文化研究者の菊池俊彦氏はオホーツク文化発生に関わるサハリンでのあり方

図 3-4 墳墓跡地



出所：筆者撮影

図 3-5 仰臥屈葬



出所：筆者撮影

を具体的に研究した研究者である。菊池氏の研究では戦前のシベリア、サハリンの調査例を駆使し、オホーツク文化はサハリン土着の鈴谷式土器にアムール河下地域や沿海州の刻文土器が流入したことで起こったとされている。

これによってモヨロ貝塚発見以来の命題であったオホーツク文化の起源にアムール河下地域が登場したのである。

また、山口敏氏は形質人類学の立場からオホーツク文化の人々のルーツに迫っている。調査によると、北方民族の人骨の中でオホーツク文化の人骨はサハリンアイヌ、ニブヒ、ウルチというアムール・サハリン地方の諸集団に含まれており、中でもアムール河中域に住むウルチ族がもっとも近い特徴を持っていることが明らかになった。

研究者たちの仮説によると、オホーツク文化が形作られたのは、基本的には大陸に起源があり、それがサハリンである程度完成され、南下したと考えられている。

3.2.4 擦文・アイヌ文化との関わり

モヨロとはアイヌ語であることは先に示した通りだが、オホーツク文化の人々はアイヌ民族とは独立した、似て非なる文化を築き上げていた。しかし、独立した文化を持っているからといって、同じ北海道に住みながら、完全に切り離された生活をしていただけではないようだ。また、オホーツク文化は上記のように大陸ともつながりを持っていた。

1970年代後半になると、上記の仮説を背景に、市町村教育委員会による発掘調査が盛んに実施されるようになった。この発掘調査によって得られた、特に大きな成果として、オホーツク文化が擦文文化に融合、吸収、消滅していく過程が土器や住居跡の変化から跡づけられたことがある。

オホーツク文化の人々は時間をかけてさらに南下を進め、知床、室蘭、釧路あたりで擦文文化の人々と交わり、二つの文化が融合したトビニタイ文化が形成された。例えば、オホーツク文化の住居には中央部に石組みの炉があり、擦文文化の住居には家の壁面にカマドが配置されているのが一般的だが、トビニタイ文化の住居では家の中央部に石組みの炉があり、壁面にはカマドも備えている。加えて、オホーツク文化の住居は六角形の縦穴が一般的だが、これは擦文文化によって塗り替えられ、トビニタイ文化の住居では四角形を基本とする家が多い。これは文化が消滅された例だ。

また、このような文化の混交は擦文文化だけでなく、アイヌ文化にも影響を及ぼしている。オホーツク文化の遺跡からは、しばしば宗教的な物が出土してきた。オホーツク文化の中で特に呪術的な道具として牙製の女性像がある。これは、集落内のシャーマンを表した物だと考えられてきた。また、クマをかたどった牙製の像も出土している。これには胴部にサハリンアイヌのクマ送り儀礼用のものと酷似した腹帯がみられ、アイヌの精神世界がオホーツ

図 3-6 呪術に使われた牙製像



出所：筆者撮影

ク文化から強く影響を受けていることを示唆した。また、このクマ送りの起源はアムール河流域にルーツがあるのではないかと考えられている。

このように東北アジア全体のなかでオホーツク文化をとらえようとする研究が進み、オホーツク文化が呪術的な信仰深い社会を基盤に、シベリアのアムール河流域を起源として、サハリンで成立し、そこから海岸沿いに再び南下して、モヨロの地へと到達し、擦文文化と混交し、消滅しながらアイヌの精神文化に溶け込んでいったのではないかと考えることができる。

3.3 モヨロ貝塚館

モヨロ貝塚館は、モヨロの人々の暮らしを「住居」「墓」「貝塚」のテーマごとに展示・紹介している施設あり、併設してある「墓域展示室」では発掘された墓地の様子を間近に見ることができる。また、周りには竪穴式住居の発掘跡や続縄文時代の住居の復元が展示してある。

遺跡には 1966 年以来網走市郷土博物館の分館としてモヨロ貝塚館が開館し、遺跡のあらましを案内していた。館内には地下に設けられた展示室において遺跡の地層を縦に切り取った状態で、貝塚などの堆積状況を復元すると共に、モヨロ貝塚の特徴的な墓制や出土品などが展示されている。

一方野外では、史跡内を一周できる園路が設けられており、特に特徴的なのは 1960 年に作られた復元住居である。これはオホーツク文化の住居跡を厳密に復刻したものではなく、戦後サハリンから北海道に移り住み、網走で生活していたニブヒ族の人々が自ら建てた物である。オホーツク文化の末裔として知られるニブヒ族の住居にもやはりオホーツク文化に似た特徴がみられ、その意味でこの復刻住居（ドローフと呼び、「土の家」という意味を持つ）は生きた資料としての価値があるのではないかと。

図 7 に示したモヨロ貝塚館は 2013 年に完成し開館したものである。これはモヨロ貝塚が発見されてからちょうど 100 年の節目にあたる年だ。貝塚を通し、オホーツク文化という文化が存在したこと、そして、彼らはアイヌ民族やその他大陸の北方民

図 3-7 モヨロ貝塚館



出所：筆者撮影

図 3-8 ニブヒ族のドローフ



出所：筆者撮影

図 3-9 史跡内の園路



出所：筆者撮影

族と関係を持ちながら、時代の流れの中で諸文化に吸収され且つ消えていったことを学ぶには最も良い施設だ。

参考文献

- ・ 米村衛,2004,『シリーズ「遺跡を学ぶ」北辺の海の民 モヨロ貝塚』新泉社
- ・ モヨロ貝塚館,出版年不明,パンフレット.

参照 HP

- ・ 網走市公式サイト
<http://www.city.abashiri.hokkaido.jp/>
- ・ 網走市観光協会
<http://www.abakanko.jp/>